



生涯のうち2人に1人がなるがん。患者やその家族の悩みを聴き、心の痛みに寄り添う「がん哲学外来」を続ける病理医で順天堂大教授の樋野興夫さん(64)が、日本対がん協会の朝日がん大賞に選ばれた。賛同者は増え、活動は全国に広がる。その一つ、名古屋の高校生の団体は協会賞を受ける。

### 朝日がん大賞の病理医・樋野さん

# 「哲学外来」で癒やす

「今日はどこから来たの?」  
東京都内の教会で8月中旬にあった「がん哲学外来」。  
コーヒーをミルクを入れながら樋野さんが尋ねると、患者は話し始めた。がんとわかったときのショック、自身の気持ちの落ち込み……。病気に悩む患者を聞く「外来」。2008年に始め、大病院や喫茶店など様々な場所で開き、約3千人の患者や家族らと対話してきた。薬を処方する代わりに出すのは、「言葉の処方箋」。「八方ふさがりでも天は開いている」「やるだけのこと」はやって、あとは心の中をそっと心配する。ほっとけ症候群」。目の前の人が自身の人生と向き合えるよう、言葉をかける。語録は、学生時代から愛読する政治学者や経済学者らの著作から引用もする。  
アスベスト(石綿)が原因の中皮腫患者を専門に診る外来を担当していた05年。治らないと悩む人の思いを受け止め、主治医と患者の隙間を埋める役割が必要なのではないかと



くつろいだ表情で患者や家族の話に耳を傾ける、順天堂大教授の樋野興夫さん(東京府内)

## 心の痛みに処方する言葉たち 全国に広がり

気づいた。  
08年、順天堂医院で5日間限定で哲学外来を開くと、予約でいっぱいになり、病院外にも出向くようになった。  
島根県の無医村で生まれた。幼い頃は体が弱く、母親に背負われ隣村の診療所まで通った記憶が医師になった原点だ。しかしなまりがきつくと、人と話すのは苦手だからと病理医になった。  
患者の相談内容は、病気や治療の悩みが3分の1、あとは家族を中心とした人間関係の悩みという。この10年間で、職場で異動を余儀なくされたなど仕事の悩みは少なくなってきた。だが、心配しすぎとか冷たいと

### 当事者だから伝えられる

いった、主に家族に不満を抱く人間関係の悩みは減らないという。そんな相談には「患者を支えようとか、互いに何かをしてあげようとか思わず、そばにいて寄り添うだけでいい。相手の必要に共感することが大事」と答える。  
樋野さんの活動に賛同した医師や看護師らが集まり、患者や家族と語り合う活動も広がっている。敷居は高くなり、お茶でも飲みながらという趣旨で「メディカルカフェ」と名付けた。現在、全国のクリニックや教会合わせて約150カ所で開催されている。カフェを企画・運営するコーディネーターの養成講座も11年に始まり、これまでに80人が誕生しているという。  
国内でがんと診断されるのは、年間100万人超。悩みに対応するには、7千カ所の「カフェ」が必要だと考える。哲学外来を「受診」した患者や家族には必ずこう勧める。「メディカルカフェ、あなたもやってみませんか」



どあつこの(左から)寺尾拓己さん、中村航大さん、彦田栄和さん。同級生の弓削響輔さんと4人でカフェを運営する。中村さん以外の3人の母親は乳がん経験者(名古屋市中区)

### 日本対がん協会賞・団体の部の高校生

団体の部で日本対がん協会賞を受けるのは、名古屋市の高校生4人が中心で運営するメディカルカフェ「どあつこ」だ。代表の中村航大さん(16)は小学2年の時に脳腫瘍が見つかり、16年に再発。リハビリテーションをしていた頃、樋野さんと出会った。後に、一緒にカフェを運営することになる幼なじみの彦田栄和さん(16)の母親がメディカルカフェを開いていたことが縁だった。  
「やってみたら」と樋野さんから提案され、中村さんは「自分の経験が役立てば」と「はい」と返事をしていった。  
彦田さんやクラスメートの弓削響輔さん(16)も賛同。入院中だった中村さんに代わり、場所の確保やチラシ作りなどの準備に駆け回った。  
中学2年だった17年2月、名

古屋市内の診療所の一角を借りて初のカフェを開いた。お茶やお菓子は小遣いで賄った。高校進学後には寺尾拓己さん(16)も加わった。  
若い世代にもがんについて知ってほしい、と8月には20歳以下を対象に「学ぶ会」を初めて開くと、小学生ら6人が参加した。参加後に「がんについて知らない子が多い」と自由研究のテーマにした小学生もいる。中村さんは「興味を持ってくれる人がいてうれしかった」と話す。  
小学校での講演活動も始めた。質問タイムで「なんでそんなに元気なんですか?」と問われ、「考え込まないことが自分の個性だと思おう」と答えた。「がんを経験して再発をして、こんなに元気なんだよ」と治療している人にも知ってほしいと思おう」(月鏡彩子)